第一章

吉川英治「剣難女難」

『キング』大正一四年一月～同一五年九月

〈国民文学作家〉

大学の講義で何かを説明するとき、学生が理解しやすいように現代の出来事や流行に喩えることがある。ところが、多種多様なコンテンツがあふれている現代では、人それぞれ好みが細かく分かれている。そのため、「これなら誰でも知っているだろう」といえる共通の話題を見つけるのは意外と難しい。しかし、かつての「大衆文学」の世界には幅広い読者に親しまれ、〈国民文学作家〉とまで称された作家がいる。その名は吉川英治。吉川は大正後期に作家としての活動を始め、昭和三七年（一九六二）に亡くなるまでに、およそ二四〇を数える作品を発表した。そして、多くの読者に支持された功績により、昭和三五年（一九六〇）には文化勲章を受章している。

吉川の作品は、没後もさまざまな形で読み継がれ、映像化もされてきた。たとえばＮＨＫの大河

ドラマでは、四度にわたって吉川の原作が取り上げられている。さらに近年では、文豪を題材にしたゲーム『文豪とアルケミスト』（DMM GAMES）にも吉川が登場し、これをきっかけに青梅市の吉川英治記念館を訪れる若い世代も増えている。

そこで第一章では吉川の作家としての歩みをたどりながら、代表作のひとつ「剣難女難」を、連載誌『キング』との関わりに注目してひもといていきたい。

「投稿熱」と窮乏

吉川は昭和三〇年（一九五五）一月から翌三一年（一九五六）一〇月にかけて、『文藝春秋』に「忘れ残りの記」と題した「四半自叙伝」を連載している。本作には文庫化に際して「自筆年譜」が附された。自身で回想して記した年譜はかなり詳細なもので、亡くなる前年の昭和三六年（一九六一）まで続いている。本章ではこの「自筆年譜」と、尾崎秀樹編「吉川英治年譜」（『大衆文学大系』第一五巻、講談社、一九七二）の双方を参照して、吉川の作家人生を振り返ってみたい。

彼は明治二五年（一八九二）八月一一日、神奈川県久良岐郡中村根岸（現・横浜市中区山元町）に、吉川家の次男として生まれた。英次（ひでつぐ）と名付けた父の直広は、もともとは小田原藩の下士で、明治維新後に横浜で開港関連の仕事に携わっていた。明治二九年（一八九六）に横浜桟橋合資会社の企業に奔走すると成功を収め、明治三四年（一九〇一）には「家運続いて隆盛を極め」[1]たという。

この時期、吉川は雑誌への投稿に熱中する。『少年』（時事新報社）に作文が入選したのを契機に、『秀才文壇』（文光堂）や『ハガキ文学』（日本葉書会）などへも投稿するようになり、「投稿熱たかまる」[2]時期を迎えた。しかし、明治三六年（一九〇三）に父の事業が傾いたことで退学、丁稚として奉公することになる。その後は活版工、横浜税務署監督局の給仕、横浜ドック会社の船具工など、さまざまな職に就くも生活は安定しなかった。大正に入ると一家で東京へ移住するが、この時期になると横浜時代からの「投稿熱」が再燃し、「雉子郎」という号で川柳雑誌へ投稿を始める。そして大正三年（一九一四）には、小説「江の島物語」が『講談倶楽部』で第一席に選ばれ、一〇月の秋季増刊号に掲載された。

新聞小説デビューと関東大震災

大正七年（一九一八）に父が、三年後には母が相次いで逝去した。私生活で大きな悲しみに見舞われたが、その一方で、文学の世界では才能が開花し始める。大正一〇年（一九二一）、「でこぼこ花瓶」「馬に狐を乗せ物語」「縄帯平八」の三作品が、それぞれ『少年倶楽部』『面白倶楽部』『講談倶楽部』に同時入選する快挙を成し遂げた。なお、この時の合計賞金七〇〇円で母の葬儀を執り

行ったという。翌一一年（一九二二）には東京毎夕新聞社に入社、家庭部に配属された。「日曜附録」に童話を書く日々が続いたが、やがて上司の命令で同紙に連載する小説の執筆を任される。これが、吉川にとって初の新聞連載小説「親鸞記」であった。

関東大震災で社屋を失った新聞社は解散となったため、吉川は生計を立てるべく牛飯屋を始めた。「自筆年譜」には以下のようにある。

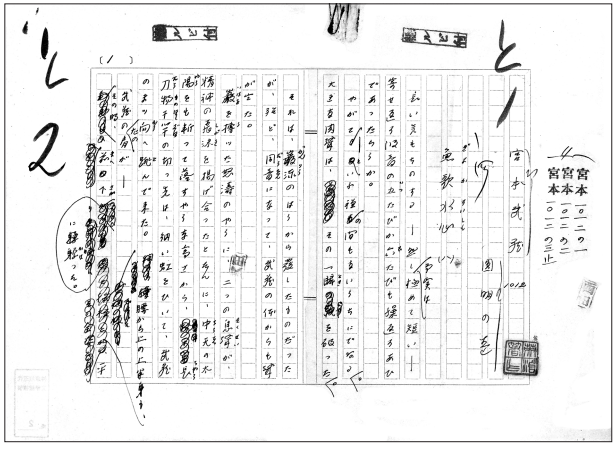
> 夜夜、焦土流離の人々と樹下に眠り、あらゆる境遇と人間の心に会う。――この事より卒然と文学の業の意義深きを感じ、身辺すべての物を売って、十月中、北信濃の角間温泉へ籠る

未曽有の大災害を契機に文学で生計を立てていくことを決意した吉川は、温泉へ籠って小説の執筆に没頭した。翌一三年（一九二四）には「中条仙太郎」「吉川白浪」「杉村亭々」など数多くの筆名を使い分けながら、諸雑誌に作品を投稿した。特に『面白倶楽部』編集長の中島民千は吉川の才能を高く評価し、同誌に多くの作品が掲載される。なかでも、七月から一二月にかけて連載された「剣魔侠菩薩」（筆名は朝山李四）は好評を博した。吉川自身も「自筆年譜」に「原稿生活の自信やつく」と記しているように、この成功をきっかけに他誌からも原稿依頼が届くようになる。こうして大正が終わりを告げようとしていた翌一四年（一九二五）、後に吉川と深い関わりをもつことになる雑誌が産声を上げようとしていた。

「吉川英治」誕生譚

大正一四年（一九二五）一月、大日本雄弁会講談社は雑誌『キング』を創刊する。詳細は本章後半で扱うが、同社が社運をかけた娯楽雑誌だった。前年の「剣魔侠菩薩」の成功もあり、吉川には創刊号からの連載依頼が舞い込んだ。このチャンスに吉川は、「剣難女難」と題した長編の執筆を決める。

そして、本作は「吉川英治」というペンネームが初めて使用された作品であった。その経緯については、松本昭の「『剣難女難』茶話」に詳しい。『キング』の編集人だった広瀬照太郎は、社運をかけて創刊するため「半ば逃げ腰の匿名などでは困る。作者の本名で書いて下さい」と吉川に求めた。吉川もそれに応じて原稿に本名の「吉川英次」と署名して提出。ところが、出来上がった創刊号を見ると、目次と作品ページには「吉川英治」と誤記されていたのだ。しかし、吉川本人はこの誤植を「なるほど、この英治の方がいいやと思って」そのまま使い続ける[3]。こうして誤植から誕生した「吉川英治」の筆名は、やがて広く知られるようになっていく。



「宮本武蔵」原稿（青梅市吉川英治記念館蔵）

国民的ベストセラー「宮本武蔵」

「剣難女難」の成功によって作家として一定のポジションを築いた吉川のもとに、ほどなく次のチャンスが舞い込む。今度は『大阪毎日新聞』への連載だった。新聞という媒体は雑誌よりも遥かに多い読者数を抱えている。読者の全てが文学愛好者というわけではないが、作品が幅広い層の目に触れる可能性をもつ。それだけに新聞というメディアは作家にとって、ステップアップのための絶好の舞台でもあった。吉川は「鳴門秘帖」と銘打ち、大正一五年（一九二六）八月一一日～昭和二年（一九二七）一〇月一四日まで同紙に連載した。

昭和も二桁に入った頃、吉川はさらなるベストセラーを書き上げる。言うまでもなく「宮本武蔵」だ。昭和一〇年（一九三五）八月二三日から同一四年（一九三九）七月一一日まで東京と大阪の『朝日新聞』で連載された。物語は関ヶ原の戦いで西軍に属して敗れた若き武蔵が、剣の道を求めて諸国を巡ることを決意するところから始まる。沢庵和尚やお通との出会いに導かれながら人間的にも成長した武蔵は、数々の強敵との勝負を経て、宿命のライバル佐々木小次郎との厳流島における決闘へ向かう。武蔵の精神的な成熟を描いた本作は、史実を踏まえつつも、吉川ならではの大胆な創作が施されているのも特徴だ。

本作の執筆経緯には、興味深いエピソードがある。昭和七年（一九三二）頃、直木三十五が「武蔵は名人に非ず」という趣旨の意見を雑誌などで唱えた。これに対し、菊池寛が「武蔵は名人である」と反論し、両者の応酬は次第に激しいものとなっていく。吉川は菊池説を支持したが、それに激怒した直木から「文藝春秋の上で呶鳴られ[4]」てしまう。吉川は直木への反論を準備していたが、直木が早逝したため、その機会は訪れなかった。この出来事がひとつのきっかけとなって書き始めたのが「宮本武蔵」であり、吉川自身はこれを「亡友の毒舌の恩[5]」という言葉で表現している。

本作は新聞連載中から単行本化され、大日本雄弁会講談社から全六巻が刊行された。本来ならば連載元の朝日新聞社が出版する流れだろうが、「特別なご厚意[6]」により、『キング』創刊以来縁の深い大日本雄弁会講談社が刊行を担うことになった。石川弘義・尾崎秀樹『出版広告の歴史 一八九五年……一九四五年』（出版ニュース社、一九八九）によれば、四巻以降から次第に売り上げが良く